プラトン的恋愛

椎名　利

『昼日中よりも、夜分にこの笑い本を読んで戴ければ　まことに幸甚。また極めて情を燃やさせ易い冊子ゆえ、いまどき生娘が残りおったとしても、それら熱高い乙女っ子には覗かさぬよう、いっち気を遣われたいものじゃ。』

（『風流滑稽譚』　バルザック　小西茂也訳）

一

「この『シラノ・ド・ベルジュラック』のテキストは、子供向けに書き直さた物語で、文学としての価値はない。ストーリーだけだ。英語の勉強のためにはそれでよい。だが、僕がこれを選んだ理由は、文学の面白みも理解して欲しかった。全訳本を是非読んで欲しい。優れた文芸作品は、読み手の知識・体験によって理解のされかたに差がでてくる。

表面は、誰が読んでも面白いと感じられる物語が語られているが、それだけではない。

つまり、作者は作品に色々なを仕掛をする。そのメッセージを読み取るのが文学の楽しみだ。

『シラノ』で言えば、醜いため自分の恋はあきらめ、クリスチャンとロクサーヌの仲を取り持ち、ラブレターの代筆をやり、自分の恋心を、終身隠しとおす悲劇のシラノ。これは表面。ここで終わってしまっては文学的な面白みはない。その奥に、作者の仕掛けている、自分の美学、心意気に生きるシラノ、これを読みとってほしい。なぜって？　君たち！　シラノほどの男、つまり、剣も強く詩人で博学な才人が、すこし醜いからと言って、なんでロクサーヌに愛されないと思う？　自分のことを売り込むなど、彼の才能を持ってすれば雑作もないことさ！　君たち！　女性と言うのは現実的な生き物なんだよ。容姿だけにだまされるものではない」

今年、W大英文を卒業した新米の英語教師『ワキャヤマ』は、少ししゃくれた顎を突き出すようにして教室を見渡した。

彼の話し方は、訛のため外人を思わせるたどたどしい日本語に聞こえ、新任の挨拶で自分の出身地和歌山を、『ワキャヤマ』と、発音したことからこれが彼のあだ名となっていた。彼の関西弁混じりの話が続く。

「シラノの情熱は、ロクサーヌに向かってはいなかったと言うことだよ。うん、愛されたいとも思っていなかった。つまり、彼は、クリスチャンを彼女の腕の中

に追い込み、彼女を近寄りがたい存在にし、彼自身は『ロクサーヌを愛する己』を愛していたわけだ。彼の愛は未完成に終わる、これが彼の美学なのだ。どうだ、このへんがわかるかな」

濃い髭の剃りあとに手をあてながらみんなを見渡した彼の風貌は、教師というより兄貴的な親しみを感じさせた。

「名作は、じっくりと読まないとわかりにくい。なに、わかりにくいのは文学だけではないって。女性も同じだって？」

締めくくりの言葉に、みんなからどっと拍手と笑い声が起き、授業は終わった。

私は、ふと（この話を彩ちゃんにすると喜びそうだな）と、文学好きな従姉を思い浮かべていた。

私は、終戦の翌年、疎開先の海憧町で旧制の海憧中学校に入学した。二年の時から新制度になり、旧制中学は新制高校となったが、今年、中学三年を迎えていた我々は、付属の中等部であるかのように、高校と一体で運営されていた。

常磐線のT町から、私鉄で一時間ほどのところにある海憧町は、絹川に面した人口一万程度の小さな町だが、この付近では中心的な町らしく、中学は男子、女子の二校があり、半数以上の人が、近郷から汽車や自転車で一、二時間かけて通学していた。

中学校は、町はずれの松に覆われた小高い丘の上にあり、建物は明治時代に作られたらしく古い木造で、表面の塗装は、どこもまだらで、指で少しづつ剥がせそうに浮いていた。

二階建ての本館の裏に、平屋の校舎が二棟あり、講堂に続いている。

左手の丘の中腹には運動場が広がり、そこに続く松の多いスロープは、格好の観覧席だった。

バスケットの練習を終えた私は、スロープの草むらに腰を下ろし、運動場を見下ろしながら、日没間近な遠い林の樹木を眺めていた。

ふと、練習中に耳にはさんだ部長の体育教師、『シャモ』とキャプテンの大川、青山の言葉がよみがえってきた。

『女子校…、フォーメイション…、センター岡山…』

切れ切れの話から、女子高のメンバー編成の相談であることが、容易に想像された。

中学にはいると男女別々になる教育制度下で、私たちの男女関係は隠微なものだった。男女の仲はすぐ噂となり、『ナンパ』と名指されると、ときにはいじめの格好の口実とされた。

今朝も登校のとき、紺と白の女子高生の一団と会ったが、先頭の小学校時代の仲間が私を認め、なにか囁き、皆を振りかえると、私の学生服には無数の彼女た

ちの目が貼り付いた。妙に意識した私は、歩き方さえぎこちなくなり、まるで彼女たちを見ると石になるギリシャ神話を思い出したかのように、前方を見詰めたまま、黙ってすれ違がった。あとで、彼女たちが、その私の様子をおかしがって笑っている情景が想像され、恥ずかしかった。

と言って、彼女たちに、なにか認められる存在ではありたかった。

その意味では、女子高チームの相談相手を務め、彼女たちの前でプレーを見せることが出来る、大川と青山が、うらやましかった。

かすかに聞こえてきた汽笛に目を凝らすと、一面の田のまばらな緑の中に、黒い煙をかすかに見せ、線路の盛り上げられた土手を走ってくる蒸気機関車が見えた。

新橋～横浜間を最初に走ったイギリス製の汽車と同じ、細く長い煙突、小さい円筒型の短いボイラーの機関車が、出入口を外部に露出させている古風な客車三両、数両の貨物を牽いてゆっくりと近づいてくる。

しきりに、蒸気を上げる。

間欠的に噴き出される蒸気は、真っ直ぐに吹き上げられ、そのたびに妙に甲高い金属的な音を響かせる。小さな車輪を必死に回転させている様子が目に浮かぶ。

のろのろした歩みなので、列車と並行して走れば、飛び乗れそうな速度で・・、グランドの下を通過しながら、汽笛を鳴らす。

やがて、お寺の森蔭に汽車が姿を消してしまうと、私はあみだにした帽子をかぶり直すと立ち上がり、

（明日は休みだから、もしかしたら彩ちゃん来ていないかな…）

異性と親しくできる、ただ一つの例外は、姻戚関係にある人たちとの交際だったので、二つ年上の従姉の彩子は、私が、唯一親しく出来る女性だった。

校門を出て緩い坂道を急ぎ足で降り、左に曲がる。

『釜屋』のような屋号が描かれた重そうなガラスの引き戸の商店が建ち並ぶ街の中心を、十分も歩くと家はもう間近だった

二

家に帰ると、やはり、彩子が来ていた。私と同じ疎開っ子で、谷村に住み、自転車で三十分ほどの海憧女子高に通学していた。

お互いに一人っ子で、私の母は、彼女が来て、私と姉弟のように過ごすのを大変喜んでいた。

彩子は、夕食の手伝いをしている。

「お皿は、これでいいのね」などと言いながら、意外に手慣れた手つきで皿に盛り付ける。

「来年は、受験ね。どこ受けるの」

包丁で刻みながら母が尋ねると、
「R大で心理学を専攻したいと思っているの。そう・・、この間英語の受験指導の時、Y先生が話していたけど、Y先生、おばさんの女学校の同級生なのね」
「そうよ、仲店通りの『ゆたかやの佳ちゃん』」
母は、海憧町の生まれであったが、この町は、婚姻も海憧町やその近郷で行われることが多く、地元の人の大部分は、家業を継ぎ、昔からの屋号で、『ゆたかやの佳ちゃん』のように呼ばれていた。
紺のジャンパースカートからブラウスの白い襟を覗かせている彩子は、大柄な目鼻立ちが、大人っぽい感じを抱かせる。ストレートな髪は、耳の後ろによせられ肩に掛かり、背はあまり高くないが均整のとれた肢体をしていた。
夕食後、私の部屋で彼女は、
「疎開の人がだんだん戻ってしまうので、寂しくなってきたわ。整ちゃんの方はどう」
「ちょうど、高一になるので転校する人が多いよ。それに都会の学校のほうが学力も高いし、僕も早く転校したいけど、まだ駄目みたい。でも、今度赴任してきた英語の先生の授業とても面白かったよ」
私は、椅子のアームに肘をのせ、ときどき髪の毛をかき上げる仕種をしながら、黙ってうなずく彼女の眼差を見つめながら、『ワキャヤマ』の関西弁をなぞりながら話していた。
「そうか、自虐的シラノか、マゾヒストね」
「僕は、あのラストの場面で、『・・、打てば響く毒舌の名人、さてはまた私の心なきー恋愛の殉教者ーエルキュウル・サドヴィニヤン・ド・シラノ・ド・ベルジュラク此処に眠る、・・』と、自分の墓標を読むシラノの格好良さしか知らなかったので、感心してしまった。それに彩ちゃん、さすがだね。マゾヒストと言い切るあたり」
彼女は、私の文学の仲間であり、良き教師だった。
多くの思春期の若者たちと同様に、私は牧歌的な愛、ストイックな恋、狂信的・情熱的恋愛に憧れ、小説に精神的愛の世界を夢見ていた。
そのくせ、セックスにも、強い好奇心を持っていた。ときどき、授業時間中に回覧されてくる『：生活』と言ったカストリ雑誌や、『・・なる結婚』の解剖学的図解で、セックスについての人並みの理解は持っていた。
しかし、哀れなことに美しい恋愛・結婚に若者らしい甘美な夢を持っていた私には、ロマンチックな小説の主人公たちの恋愛に、どうしてもセックスシーンを妄想することは出来なかった。
それは、精神的愛こそ純粋な愛と考える青春期にありがちなストイックな恋愛観に由来していた。

この歪んだ考え方を、現実的にする糸口を与えてくれたのは、彩子だった。
ある時、いつもなにかコメントしてゆく彼女が、黙ってバルザックの『風流滑稽譚』を置いていった。
三巻にわたるこの物語は、セックスに対する露わな性描写があるわけではないが、一性行為を暗示する程度だった一聖職者や騎士の恋の有様が、粋な文体で飄々と書かれていた。中世の人々の体臭と熱気に充ちたこの愛欲物語を、ユーモラスに語る作者の筆は、優雅でエロチックだった。
一見、道徳的な言葉を口にする未亡人の言葉を、真に受けばかをみる話、無意味な戒律に縛られ、煩悩に悩む僧侶の話など、人間の弱さ、欲望が描きだす人間模様に恍惚となった。それは性愛を肯定し、現世を楽しもうとする生身の人間が演じる人間劇場だった。
このような事柄が、私の恋愛観を、徐々に現実的に変化させていった。

三

右サイドを走る私は、センターDからの長いパスを、ジャンプしてしっかりと捕らえた。バスケット・シューズが床できしむ。目の前に左手を高く挙げ、水平な右手で私のゴール下への侵入を防ぐ小柄なガードが目にはいる。
前方に切り込むモーションを見せ、前のスペースを空け、ゴールの方向に躰を回しながら目標を確認する。
ちょうど、バックボードが真横で、クリーンに狙わないと入らない位置だが、私は躊躇なくゴールを狙った。
ボールの勢いをころす、高いシュートを放つ。
きれいな放物線を描いたボールは、軽くネットを揺すると、ゴールに吸い込まれた。
サイドから、私の得意な中距離シュートが決まった。
歓声、拍手が海憧女子高の体育館にわきあがる。
夏休み終了と同時に開始される女子の県大会のため、われわれのキャプテン大川とマネジャーの青山は、この一週間、女子高の合宿練習の指導をしていた。
今日は、その仕上げのための練習試合が計画されたが、レギュラーチームでは相手にならないため、我々中三のチームが編成された。
夏休みではあったが登校日のためか、体育館は見物する白いブラウスの女生徒で埋め尽くされていた。
前半は、二十対二十の同点で終わった。
コートサイドのベンチに戻ると、大川が
「お前、あがってしまって駄目だと言っていたけど、なかなか見事だよ」
私は、タオルで汗を拭きながら、私の背中を軽く叩き上機嫌の大川の顔に目を

向けるとともに、相手ベンチのセンター岡山になにげなく視線を走らせていた。

昨日、我々が集められ、この話を聞くなり反対したのは私だった。

私は人一倍毛深かった。ランニングにショートパンツ姿から現れる、胸毛・すね毛を考えるといたたまれない羞恥心を覚えた。

「あの・・、僕、女子との試合ではとても恥ずかしくて、あがってしまうので駄目です」

上目でこわごわと大川の顔色をうかがうと、彼は薄めの赤い唇に笑みを浮かべ、「お前、少しませているぞ。中学生のくせに女を意識するなんて、生意気だ。でもな・・」と言うと、私にだけわかる視線をなげると、口元をほころばせた。

それはバスケット部に入部して間もない、梅雨の日曜日のことだった。私は、雨ではあったが体育館で練習しようと思い、学校の門をくぐった。

体育館は、すでに使用されているらしく鍵が開いていた。しかし、誰も見えない。ボールを出すため部室のドアーを開けると誰かが二人寝そべり、なにかを一心に見ていた。びっくりしたらしい顔を私に向けた。

それは、大川と青山だった。

六畳程度の部室に、体操競技で使い古されたマットを敷き、二人はそこに寝そべっていた。部屋の中は、薄暗く、汗と獣臭さが充満していた。

私に気が付いた大川は、

「名木か、ちょうど良いところに来た。ここへ来い」

言われるままに、私は、彼の横に座った。

大川は少しニキビがあり、脂ぎった臭を発散させていた。目は、細くややつり上がり、薄めの唇は、異常に赤かった。彼の躰は、全身バネだった。軽がると放すロングシュートの時などランニング姿から見える筋肉は、固くしきしまり、もりあがった。

また、彼はしなやかな躰さばきで、ジャンプシュートやランニングシュートを放つ名センターで、誰の追従も許さなかった。

このぬきんでた力量から、部での指導性を疑う者はいなかった。彼の指導は厳しく、手のひらで背中をたたかれたりすると、手の形が赤く背中に残るくらいだった。また、容赦ない言葉が浴びせられるので、私たち下級生は、出来るだけ彼の圏外にいることを心がけていた。

それに引き代え、青山はやさしい面倒みのいい上級生で、まさにマネージャーだった。小柄な躰で早足に歩く彼は、入部当時から私のことを「整、整」と、あたかも弟のように、かわいがってくれ、自宅に私を呼び寄せては、教科の指導もしてくれる学力とやさしさを持っていた。

彼らが熱心に見ていたのは、一枚の春画だった。
和紙に描かれた着物の男女は、ぼかされてはいるものの性器を露わに見せ、誇張された男女のものは異常にリアルで、なにかをこらえるかに見える女性の表情に、私は初めて性愛場面を見た。
私は、羞恥心で顔を真っ赤にしながらも、好奇心から目を離すことは出来なかった。
「名木、お前、見たことないだろう。よくみて見ておけ」
大川は、私が恥じらいと好奇心のいり混じった当惑げな表情をしながらも、食入るように見つめる顔を眺めると、続けて、
「入部した時から、名木、お前は女みたいで、かわいい奴だと思っていたよ」
青山に目配せをすると、私の血管が透けてみえる白い手を握り、汗くさい躰で私を抱きすくめた。私は、大川に握られた自分の手と、彼の小麦色をした筋肉質の手を見較べていた。
二人の秘密めいたけはいが伝わってきたが、じっとしていると、なにかが行われていた。しばらくすると大川は私を強く抱きしめると、
「ナオミ…」
くぐもった声が、私の耳元で聞こえると、ややあって私を離した。
離れてみると、彼は射精していた。
以後、青山は、自宅でも、たまにヌード写真や、婦人雑誌の付録を手に入れてきては、恥ずかしげな様子の私に、女性の性感帯、夢精、マスタベーションについて語ってくれた。
このような青山の教育が、私の『もの』を立派にerectさせ、世間で言う『悪癖』も覚えさせていた。

四

歓声の中で後半が始まった。
海憧女子高のチームは、センター岡山のワン・ウーマンチームだった。彼女は、私より背はやや低いがー私は一七〇センチだったーつるっとした白い肌で、ふっくらとした体格をしていた。短いスカートのような白いショートパンツで、小作りの顔の少し上向の鼻が愛くるしかった。大きなわりには機敏で、全体をよく見渡して的確なパスを出し、自らもドリブルで切り込み、ジャンプシュートを放つポイントゲッターだった。
彼女は、かなり強引なシュートをみせるが、下手にガードするとこちらがはねとばされそうなスピードと体格を持ち、我々を寄せ付けず、得点のたびに、
「ナオミ、ナオミ」の、コールが湧き起こった。
守りは、2ー3のゾーン・デフェンスを敷き、彼女がゴール下を堅めていた。

後半開始直後、センターDの絵に描いたようなポストプレーが決まり、我々が優位に立ったが、非力だと侮った彼女たちに、中距離シュートを二本たて続けに決められた。私も、自分の防御相手のちびだと見くびったガードのフェイントに引っかかり、あっさりと抜かれゴールを許していた。

その後、試合は一進一退で進んだが、常に彼女たちが一～二ゴール先行していた。

私が、ちらりとベンチを見たときはタイムアップ一分前だった。右サイドからドリブルで一人をかわし、ゴール下に切り込んだ。と、岡山が大きく立ちはだかるのが目に入った。フェイントをかけると、彼女が大きくジャンプする。タイミングをみはからいジャンプ・シュートを放った。ガードのためにあげられた彼女の右手が私の腕に触れたが、ボールはゴールのネットを揺すっていた。

しかし、大きくジャンプした岡山の躰は、バランスを失い私に倒れかかった。

その彼女の腿が、空中で私の大腿部に接触すると、はずみで私は尻餅をついた。と同時に、私の胸のあたりに、胸を押しつける格好で、彼女は落下してきた。

私は、彼女に完全に組み敷かれていた。

弾力ある彼女の躰に潰された私は、不思議な感触に、一瞬、呆然となった。

乳房？と思うと、まだ見たこともない白い幻影が、頭の中で渦巻いた。

失笑・嬌声・嘆声の中で、私は、彼女の手を借り真赤になって立ち上がった。

ツー・スローのファールを宣するレフリーの声で、ようやく我に返った私は、ボールを一回、二回と床にバウンドさせ気持ちを集中させる。

汗がしたたり落ちた。ゆっくりとボールを構えると、体育館は静まり返り、あたかも擬音のように響く心臓の鼓動が、私に次の行動を促した。

正確なシュートを誇る私の一投目は、無惨にも大きくそれ、かすかにネットをかすった。二投目のボールは綺麗な放物線を描いてゴールに向かったが、リングの付根に当たり真上に跳ね返り、はずれた。懸命にフォローしようと飛び込むと同時に、タイムアップの長い笛が鳴った。

試合は、四二対四一で女子高の勝利に終わった。

拍手・歓声の中をベンチに引き返すと、青山が私の肩をたたきながら健闘をたたえてくれ、大川は例の細い目に秘密の笑みを浮かべると、

「こいつ・・」と、私の額を小突いた。

私は家に帰り、自分の部屋で横になったが、興奮はなかなか収まらなかった。胸に貼り付いたように残る岡山の躰から感じた得たいの知れぬ感覚が、意識の中にぬめぬめと蘇ると、何か恥ずかしい行為を見られてしまったばつの悪さを覚えると共に、秘密を独り占めしている快感に酔った。

彩子がやってきたらしく、話し声が聞こえてきた。

「おばさん、今日、整ちゃん格好良かったのだから」
母に一部始終を話している様子が、ときどき起こる笑い声とともに聞こえてくる。　私は、彩子が始めから見ていたと思うと、得意な反面、どう映ったのだろうかと恥ずかしかった。
やがて、彼女は私の部屋に入ってくると、
「岡山さん、私のクラスだけれど、かわいそうに、みんなにわざとやったのじゃないの、とか、『ご感想は・・・』とか言われていたわよ。
それに、あなた、毛深くてすてきだって、大変な人気よ」
私は、いたずらっぽい目で、覗き込んむ彩子に、悪さをした子が悪さを見つかったとき示す、ばつの悪さと、悪さゆえに存在を認めさせた得意さを覚えていた。

五

高二を迎えようとした三月の半ば、彩子がやってきた。その日、母は出かけて留守だった。
彼女は、今年、R大の文学部に入学していた。
いつものように私の部屋にくると、
「明日、東京に発とうと思うので、お別れに来たの。あなた方はいつ横浜に戻るの？」
「うん、来年みたい」
「じゃ今度は、横浜に遊びに行くわね」
すっかり受験から解放された彩子は、試験のときの緊張感や、今度引っ越す家の様子などを話してくれた。私は、都会に戻れる彼女がうらやましかった。
紺のカーディガンから白いブラウスを覗かせた彩子は、持ってきた数冊の雑誌を手にすると、今年、『群像』の新年号から連載されている大岡昇平の『武蔵野夫人』を読んでいるかと、問いかけ、私が、（知らない）と答えると、
「ラディゲの『ドルジェル伯の舞踏会』をまねた恋愛小説で、フランスの伝統的な心理小説を意識したものらしく、ストーリーは、スタンダール研究者の妻が、権威主義的な夫に失望し、従弟との恋におちるという物語らしいの。いま二人が武蔵野を散歩して、恋が窪まで来たところだけど・・」
彼女の関心は、私の関心でもあった。
早速、雑誌を手にしようとすると、彼女が声をひそめ、
「整ちゃん、キスしたことある？」
意図をはかりかねた私が、
「まだないよ」と、笑いながら答えると、
「どんなのか試してみない」
冗談だと思った私は、近づけてきた彼女の真面目くさった顔を見ると、思わず

目を閉じた。
とても不思議な匂いがかすかにした。
彼女は、私の頬に両手を当てると、唇を軽く押しつけてきた。儀式めいた彼女の態度に、しばらくじっとしていたが、彼女が、わずかに開いた私の上唇を自分の唇で咥えるようにしたとき、彼女の暖かく柔らかい唇の内面に触れた。
彼女の体温が伝わってきそうなところで、彼女が、バストを大きく息づかせている。
少し手を動かせば、触れられそうな位置で…。

この先をバルザックの『風流滑稽譚』 風に書くと、こうなるのだろうか。
『噂の美女、彩姫は、従弟に当たられる整殿を呼ばれ、申さるる。
『妾はまだ殿方の槍なるものを知らぬ。それゆえ、そもじのものを見せてたもれ。妾のものもみせようぞ』と言われ、むっちりと張った白い誘惑を垣間見せ、燃えるような艶然とした眼差しを送った。しなやかな白い手を、股間に滑らせると、むんずとその槍を掴み出された。
『槍はしごくものよの』と仰せられ、しごくこと数度、白い花びらが舞にける。
『あな不思議、そなたの槍は、塩を吹くのかえ』』

これは、私の幻想だった。
私たちは、それから先に進むには、あまりにも未熟すぎ、タブーを犯す凛々しさにも欠けていた。
やがて唇を離した彼女は、顔にかかった髪をかき上げると、
「それでは、お別れね」
宝橋まで送るつもりで、私は自転車を押しながら、桜並木の絹川に通じる掘に沿って一緒に歩きだした。
桜の蕾が、膨らみかけていた。
絹川と堀の合流点の水門から眺めると、絹川は、松の低く生える丘陵の裾を巻くと、大きく右に迂回し、私たちの目の前を流れていた。対岸には、人家もほとんど見えず、樹木の緑が土手に重なり、碧い空が広がっていた。土手は、コンクリートに固められている部分がわずかにあるものの、大部分は雑草で覆われている。たまに土手の道を自転車がのんびりと走っていた。
水門の少し下流には、鉄骨が梯形に組まれたグレーの宝橋が、両岸をつないでいる。
川幅、二百メートル程の絹川も、水の流れている部分は三分の一程度で、水のない河原は、海岸のように白いさらさらした砂の広がりを見せ、夏には、ここが水泳場になっていた。

私は、橋のたもとで彩子と別れた。彼女は、胸を突き出し気味に自転車を進める。進むにつれて、橋梁のトラスが彼女の背に順に影を落してゆく。やがて橋を渡り終えると左に曲がり、土手の上の道をゆっくりと走りだした。

私も並行して土手の道を自転車で走った。彩子の白いブラウスが、バックの木々の緑に映し出されながら進んで行く。ときどき、車輪のポールが眩しく陽に輝いて見えた。

十分も走ったろうか。対岸の彼女が立ち止まると、両手をいっぱいに広げ、高く挙げた。私も大きく両手を振り、別れを告げた。彼女は、バックミラーを一瞬煌めかせ、やがて土手の下の道に降りて見えなくなった。

六

私が海憧町から横浜に戻ったのは、高三になるときだった。私は浪人したものの志望通り、P大の工学部に入学した。

学生時代、彩子は、しばしば私の家に遊びに来た。

輪郭のはっきりした目鼻立ち、細めに引かれた眉、笑うと大人っぽく感じさせる大柄の唇、髪の毛をかきあげる何気ない仕草は、従姉というより、女性だった。

訪れてくると、よく私と横浜を散歩した。ときには、テープが飛び交う外国航路の出港を見送ったり、港に隣接する公園で時を過ごしたが、彼女は、山手の海が見える丘が好きで、あきもせずによく歩いた。

その丘は、明るく夢に富んでいた。

アーリーアメリカン風の白い建物、ゴシック風の教会、蔦の絡んだミッション系の女子校に、未来の家や子どもの教育を投影していた。

私たちは、ごく自然に腕を組んだ。

公園のベンチを照らす薄明かりの元で、ふと寄り添い語らっているとき、彼女はまぎれもなく私の恋人だった。

だが、彩子には、他の女友達とはごく自然にしている性愛的な行為を求めることはしなかった。

さりとて、『愛している』などの言葉は、外国語で話すように空々しく、口に出来なかった。

愛を語るには、身近すぎたのだろうか。

四年生の夏、母は、

（留守の間、彩子さんに来てもらうように頼んであるから）と言い残して、父と二人で旅行に出掛けた。

アイボリーのスカートにタンクトップ、シースルーのレースのブラウスを着けた彩子の透けて見える肌が、眩しかった。

食事の後、彼女は少しためらいながら、
「結婚するの。来年の春に…」
その言葉を聞いたとき、私は、これでよいのかと、自問していた。
その私をよそに、彩子は、
「ほんとは、私、整ちゃんに悪いことしているの。もう、時効だから話すけれど、覚えているでしょう、あのバスケット部のセンター岡山さん。あの試合の後、彼女からあなたに、ラブレター渡して欲しいと頼まれていたの。でも、なんとなくあなたに悪いこと教えるようで渡せなかったわ。でも、この間、アルバムの整理していたら出てきたの」
彼女が差し出したのは、女ものの封筒に入れられた一通の手紙だった。

七

名木　整様
このような手紙を書くわたしは、あなたみたいな優等生から見ると、不良学生ですね。
わたしも自分自身の大胆な行動に、軽い眩暈を感じています。
この間は、ごめんなさい。
と言って、決してわざとしたわけではありませんが、意識過剰だったかも知れません。
それにしても、あなたはやさしい方です。
もれ承るところによると、あなたのシュートは、正確なことで定評があるそうですね。
そのあなたがフリースローを二つも外し、わたしたちに花を持たせてくれたわけですから。
いいえ、むしろ、わたしが躰を張って防いだと言うべきかも知れません。
今でも、わたしは、あなたの汗にぬれた異様に白い肌を、覚えております。
あなたは、あの試合まで、わたしのことなどご存知なかったと思いますが、わたしの方はよく存じ上げておりました。
なぜって、あなたの噂は、大川さんからよく伺っていましてよ。
それに、彩子さんの従弟さんですもの。
でも、あの時まで、あなたはわたしのなかで、神経質そうな、ガリ勉の坊やでした。
しかし、あなたの活躍を目の当たりに見てー肌まで接したのですからあたりまえですわねーすっかり見方が変わりました。
それに、すね毛もすてき！
そのあなたに交際を求めても、あなたの道徳観からは受け入れてもらえそうも

ありません。
それに、二つ違いのお姉さんですものね。
あなたは、『プラトン的恋愛』をご存知ですか。
『プラトニック・ラブ』とのお答えでは、合格点はさしあげられません。
精神的な愛、それも素晴らしいですね。
しかし、アダムとイブではありませんが、おいしいものはおいしく頂かせてもらって良いのではないでしょうか。と思って、わたし、本を少し調べました。
学問は、やはり現実的です。
人間のためにあるのです。
ルネッサンスに流行した『プラトン的恋愛』は、精神的な愛だけを善としているわけではありません。
あなたみたいなモラリストには、理論武装させて上げないと、怖くて自分の殻から出られませんものね。
このような話に興味を感じられたら、ご返事下さい。

昭和××　　岡山直美

（追伸）彩子さんは美しい方です。
でも従姉弟同士は、優生学的に望ま
しくありません。

『プラトン的恋愛』とは、プラトニック・ラブと考えていた私は、少し面食らった。
と、同時に岡山に押しつぶされた情景を想い出し、苦笑した。
（岡山さん、こんな機知に富んだ女性だったの？　それにしても高校生にしては大胆なラブレターだな。バルザックのコントみたい）
私が彩子に目をやると、彼女は、婦人雑誌のページを黙って眺めていた。
しかし、岡山の言う『プラトン的恋愛』　の意味は、理解できなかった。
早速、学校の図書館で関係書を参照した結果は、次のようだった。

『プラトン的恋愛』
フィレンツエの哲学者マルシーリオ・フィチーノ（一四三三―一四九九）が説いたもので、当時の知識人の間で流行した。この理論は、プラトンの『饗宴』　からとられたもので、愛の神ヴィーナスは、二人おり、一人はウラニア（天上の）、他はパンデーモンス（世俗の）と呼ばれている。ルネッサンスのプラトン主義者が、あえてこの二人のヴィーナスに注目したのは、世俗的な愛の快楽に、多くの価値を見いだし始めていた十五世紀の人々にとって、世俗的な愛は、罪のあるとする

キリスト教の教えは、調和しがたい矛盾となっていた。この矛盾を解決するためにフィチーノは、人間的なるものを神聖なものに向かう過程と解釈し、どちらも人間にとって美しいとした。ボッティチェッリの『春』、『ヴィーナスの誕生』は、この二人のヴィーナスを現わしている。

八

アトランタからラ・ガーディア空港に着いたのは、ちょうど二十時だった。ゲートを出ると、明るいラベンダーのジャケットにショルダーバックを下げた彩子の姿が見えた。有能なキャリヤーウーマンらしい知的な容貌だった。タイトスカートは、躰にぴったりとフィットし、丸みをおびた腰の線を見せていた。

気おされた私が、眩しげに視線を向けると、

「しばらくね。何年ぶりかしら」

「うん、彩ちゃんの結婚式以来だから、十五年ぐらいかな」

私のアメリカ出張は、珍しく予定より早く終わり、ニューヨークで二、三日の余裕ができたのだった。

S商事に勤める商社マンの夫が、数年前にニューヨーク支店勤務になると、子供がいない彼女は、N大学心理学教室のアシスタントを勤めていた。

今日も仕事の帰りにみえた。

「食事はすんでいるの」

「機内食がでたので・・、あまりすいてない」

「そう、軽い食べ物なら家にあるから、真っ直ぐ帰りましょうか。彼、今夜はシカゴなの。明日の夜は一緒に食事しましょうて…」

私とつもる話をしながらも、彼女は、グリーンのポンテアックを軽々と運転し、ダウンタウンに向かった。

彼女の住まいの広々としたリビングルームは、ベージュの絨毯が引き詰められ、革のソファーが置かれていた。きちんと整理された部屋は、整然としすぎて生活実感に乏しかった。

着替えてきた彼女は、キャミソールのワンピースで、アイボリーに花柄が鮮やかだった。

ぴったりと躰に貼り付いたドレスの深く切れた胸元からは、意外に豊満な胸が覗き、私をどぎまぎさせた。

「すてきだね。そんな格好の彩ちゃん初めてみたよ。それに、すごくセクシーだね」

「整ちゃんも、如才ないサラリーマンになったわね」

「さあ、おいしい、カルフォルニア・ワインがあるの。飲みましょうか」

いくぶん辛口の白ワインが、全身に浸透していくと、酔いが、仕事から私を解放した。

久しぶりの話は、疎開、海憧、横浜のことと尽きなかった。

「最近、海憧町に行くことあるの？」

「もう、海憧町ではなくて海憧市だよ。年に一回はお墓参りに行くけれど、町の様子はあまり変わらないよ」

「そう、あのころの写真、見せましょうか。モノクロだけど」

彼女の古いアルバムの一頁目は、丸々と太った裸の赤ちゃんの写真だった。下に丁寧に『彩子一才の誕生日（昭和××）』と記されていた。

順番に見てゆくと、私と一緒に撮った写真が何枚かあった。『名木整君と一緒に（昭和××）』と、それぞれ注釈されていた。

私は、この『名木』の筆跡になぜか引っかかった。どこかで見た気がしたが思い出せず、トランプ遊びの『神経衰弱』のように、記憶のカードをしきりにひっくり返していた。

アルバムから目を離し、ワインをゆっくり飲むと、視線を宙に漂わせる。

ソファーに並んで腰掛け、手元を覗き込んでいた彼女が、

「どうしたの・・」

私の顔を、うかがうように躰を寄せてきた彼女から、アンフィニの匂いが漂ってくる。

「うん、この筆跡、彩ちゃんのものだよね？」

「ええ、そうよ…。それがどうか？…」

いぶかしげな目を私に向ける。

私は、ちょうど題名を忘れた本を探しているみたいだった。本棚をいくら見ていても、見つかるはずがない。

空白の時間が流れた。

突然、弾けるように笑いだした彼女は、私の膝に顔を伏せると、全身を笑いでふるわせた。

その時、不意にあのラブレターが鮮やかに浮かんできた。

ラブレターの文字とアルバムの文字がゆっくりと重なった。

彼女は、まだ私の膝の上で声を上げて笑い続けている。

オープンハートのピアスが、金色に輝き揺れている。

大きい襟刳りのドレスから、白いうなじの産毛をふるわせて・・・・。

「そうか、彩ちゃんか・・・・」

私は、彼女のうなじにそっと唇を寄せた。

彼女の笑いがぴたりと止まった。

心臓が鼓動を大きくした。

やがて、彼女はゆっくりと躰を起こすと、私の頬に手を軽く触れると、
「時効、寸前だったわね」
微笑んだ彼女の腰に、両手を回すと、彼女は静かに目を閉じた。
そっと抱き寄せると、しなやかな彼女の腕が、しっかりと私の首を抱えた。

『整殿なるご仁、若きころ、とある合戦で不覚をとったことを恥じ、以後、武者修行に励み、今は並ぶ者なきあっぱれな武者振りでござった。彩妃の堅牢を誇る二つの砲丘を苦もなくもみしだき、緩やかな起伏の香しい丘陵を、春風のように軽やかに走り抜けていた。やがて柔らかき艶やかな草に覆われた谷間に踏み込まれた。あまりにも美しいその風景に駒を止め、降りると、艶やかな草に手を触れた。
不思議や、その大地から、突如、熱き泉が湧き出たと思し召せい！
手を差しのべたこのご仁、
『いや、これはよい湯じゃ』と、甲冑を脱ぐのももどかしげに、ざんぶとばかり飛び込んでおじゃった』

『パンデーモンスのヴィーナス』が、微笑んだ。

（注）『プラトン的恋愛』は、『絵画を読む』
若桑みどり（ＮＨＫ人間大学）を引用
させていただいた。